

章 提

(この時あたりに金色の光がみなぎる、天華がチラ／＼降る)

(だまつて手を合せる、天華降る、微妙な音楽がかすかに聞える)(ふいに立ち上る)

あゝ美しい雲が……。

あた／＼まぶしい程美しい御殿が……。金の屋根がきら／＼光る。

あれあすこに清らかな聖者たちが見える。

あゝこちらには蓮の花が一杯咲いてゐる。

おゝ氣高い香よ……。

あゝ、こちらの清らかな御國。

まるで、澄みきつた鐘のやうな、あの静かなひかり。

あれ、あれ、香の高い蓮の花が一度にひらいた。

まあ、ひとつ／＼の花から出る金色の光。一つ一つの光の中に佛さま。

いらつしやる。佛さまたちのお聲がきこえる。

清らかなお聲があり／＼きこえる……。

世尊(世尊に)あの尊い御國は、どなたのお國ですか？

世 尊 あれは阿彌陀様のお國です。

章 提 わたし、わたし、あの清らかな御國へ行きたうございます。

世 尊 よく仰有いました、あの阿彌陀様こそ、私共の罪を引受けて下さる情け深い

いお方です。そのお身體の高さは、六十萬億丈恒河の砂の數程もあつめたま

ふ、お姿に八萬四千の別があり、一人一人のお姿に八萬四千の光があり、そ

の一人一人の光は普く十方の世界を照しいつも念佛を唱へる人の許においで

になります、誠に無量壽佛の御身は法界に充滿して、その本願の御力によつ

て阿彌陀様をおもひ奉るものには誰にでも拜むことができますのです、そし

ていつも罪深いものをお救ひ下さいます。あなたの夫ピンバサラ王様も潔よ

く御子アジャセ王殿の御所刑にしたがひ、そしてお慈け深い阿彌陀様におす

がりになつたので今頃は極樂淨土に楽しくお暮し遊ばしてゐらつしやるでせ

う。あなたの御子阿闍世王殿もやがて犯した罪の恐しさに、すべてを佛に懺悔遊ばす時が来るでせう。おすがりなさい、あなたは罪深い弱い女です。あの阿彌陀様の御慈悲におすがりなさい。

世 妃

有難うございます、有難うございます、妾はまあ何と言ふ幸福者なんでせう。誠に佛を讀へる者は、どんなに罪深い人でもいやその罪の深ければ深いだけその人の幸福は増すのです、おすがりなさい、唯何事も忘れておすがりなさい、然し唯一人佛を嘲けり佛を罵り先王を勸めて森の仙人の命を取らせ、その上自分の利益のためにアジャセ殿を唆かして恐しい親殺しの大罪を犯させ、たあの惨逆の提婆達多許りは、その罪の報いとしてあの恐しい地獄の唯中へ今尙、佛を呪ひながら一人淋しく落ちて行くのです。貴君にはあれがお解りになりますか。

(この時地獄の中に苦しむ提婆の姿がアリ〜と見える)

世 尊

かうして犯した罪はきつと自分に報いて来る因果はめぐる小車の、幾世定め

ぬ未来から未来へと、めぐりめぐつて絶える時はないのです。

(この時かすかに次の歌聲がきこえて！)

—— 静かに暮 ——

「懺悔文」 合唱

降
魔

降

魔

(三)
幕

五
三
七

五
三
七

◇登場人物◇

行者(後に釋迦)	一	後に妃ヤスタラ。
牧の少女ナンダ	一	後に天女。
行者	A	
同	B	
大 魔 王	一	後に城の急使。
同	二	
同	三	
同	四	後に王子ラゴラ。
同	五	
吉利(ナンダの兄)		

第一齣 印度の國。ある森の果

着いうるんだ様な水が、平野の中を流れてゐる。
 遠望にヒマラヤの頂さが、白く見えてゐる。
 熱國の強い日射しを受けて白く光る、草の葉が軽いゆるやぎか見せてゐる。
 棕櫚樹の葉がカサコソと鳴る。
 まだ暮の上らない内に牧者の吹く角笛の音が、のどかにほど遠く聞えて来て……

(静かな曲)

幕 開 く

棕櫚樹の蔭に行者が倒れてゐる。
 修業者A及B登場

A B A

「喬答摩もとうと棒折れをしてしまった。
 「何しろ、もとは王の家に生れて榮養榮華をしてゐられたのだからね。
 「大體あんな方が、最初から苦行をしやうとするのが間違ひなだ。修行と言ふ

降 魔

ものは。そんな喬答摩の思つてゐるやうな樂なものではないのだ。

「これからどうしようと言ふのでせうね?.....」

「大方國へ歸つて王の位にでも就くのだらうよ。.....フフそれが本當なのだからな。」

「(行者の倒れてゐるのに初めて氣がつく) おゝ! 其處に倒れてゐるのは喬答摩ではありませんか?」

「大方身體のあかを洗ひ落さうとしてあの尼連禪河の水にでも這入つたのてせう。」

「助け起してあげようではありませんか.....」

「打遣つて置きなさいよ。」

「でも、あのまゝでは、もしも.....」

「(押被せる様に) 大丈夫ですよ。喬答摩が生れた時に、仙人が言つたぢやありませんか。この子は大きくなつてから後、世界を征服する轉輪王になるか、

A B A B A B A B

世界を救ふ佛になるか、どちらかだと.....。轉輪王にもならず。佛にもならず。命を捨てる様な事もありますまい。

「(餘程心して) しかし.....(行きかける)」

「(強く) 打遣つて置きなさいと云ふのに。我々は自分の修行が肝心です、さあ、行きませう(捨せりふにて行く)」

「(やゝ遅れて行者に心を残し乍ら行く。)」

舞臺暫く空。遠く屈托氣に牛のなく聲が聞える。

と.....遠くの方から牧の少女ナンダの唱ふ聲が聞えて来る。

行者は矢張り倒れてゐる。そしてナンダの唱聲はだんだん近づいて来る。

(ナンダの唄)

泉とわけよ

清らけき乳

聖の牛の

B A B

その乳こそは

神の御園に (乳酪の壺を肩に唄ひ乍ら登場)

わかかへる

直白き玉の

泉なれや。

ナンゲ「(獨言) 一千の牛のお乳を、五百の牛にのませて、五百の牛のお乳を二百五十の牛にのませて、段々と牛の数を少くして、おしまひの八ツの牛から搾り取つた、蜜の様なお乳を金の鍋に入れて、ためつめたこの乳酪は、世の中で一番尊いものでふいます。わたしは。この尊いお乳を、世の中で一番尊いお方に捧げて、この上もない幸を得たいと思ひます。天の神さま、地の神さま。わたしを世の中で一番尊いお方に遇せて下さいませ。今日、わたしが最初に遇ふ方がその方であるやうにお願い致します(又唱ふ)

泉とわけよ

清らけき乳

聖の牛の……(行者を見る)

あら! あそこに誰か倒れてゐるわ。(壺を置いて走りよる)

あなたどうかなさいましたか、しつかりなさいませ、しつかりなさいませ。

行者「(やどら身を起こして) 有難ふ。

ナンゲ「(その威嚴のある顔に愕いて引下る。つくづく見入る益々威に打たれる)

あなたは、世の中で一番尊い方でふいませうし(壺を差出して)これは、世にも尊い乳酪でふいます。召上つて下さいませ。

行者「あなたのやうなお優しい方から、この供養を受けることを有難く思ひます、

(壺を取り上げて静かに飲む)

ナンゲ「あなたは大層やつれてゐられます一體どうなされたのでふいます。

行者「わたしはこの六年の間、殆ど食物と云ふやうな食物を取らずに來ました。そして出来るだけ苦しい行をして來たのです。それが爲に身體も心も疲れ切つ

てゐます。

五四四

ナンダ「なぜ、その様な事をなさつたのでムいいます？」

行者「わたしは世の中の本当の事が知りたかつたのです。

ナンダ「世の中の本当の事とは、どんな事でムいいます。」

行者「人間には「病」と言ふことがあります。「老」と言ふことがあります。「死」と言

ふこともありません。それは、どんな貧しい人でも、又どんなお金持ちの人で

も……譬へば、王さまの様な身分の高い人でも同じやうにあるのです。私

達は、まるでそれに気づかないで暮してゐますが、やがて一度は皆それが廻

つて来るのです。その時始めて人間の果敢なさを識ります。そして、周章て

ます。悶へます。苦しみます。わたしは、その老病死から、人間の救はれる

道がないか、それが識りたかつたのです。その爲に、出家して、苦しい行を

して来たのです。食を取らなかつたのも、その爲です。だが、身體ばかりを

苦しめて、それが分るものではないと言ふ事を識りました。本当の修行は心

でせねばなりません。わたしは身體をやすめるために、あの河に入つて、長い間の體のあかを洗ひ落そうとしました。然しわたしの身體は、疲れ切つてゐました。それに支へ切る力さへ無かつたのです。もしも、あなたに助けられなかつたら、もしも、あなたに、この供養を受けなかつたら、わたしは、死んでしまつてゐたかも知れません。有難うございました。(立上らうとする、よろめく)

ナンダ「(驚いて、支へる) おあぶなうムいいます。」

行者「氣は勝つてゐますが、身體ばかりは思ふやうになりません。」

ナンダ「支へてあげませうか。」

行者「では、お願ひ致します。」

ナンダ「これから、どちらへお越しでムいいます。」

行者「迦耶の方へ行きたいと思ひます。あそこは靜かに物想ひするのによい處ですから。」

ナンゲ「では、そこまでお見送り致しませう。

行者「有難う。

(二人静かに行く。)

(後を追つて、修行者A・B出て来る)

修行者A「(見遣りつゝ) あの有様はどうだ。

修行者B「女に手を引かれて行くとは、あんまりです。

A「喬答摩もとうとう墮落をしてしまった。

B「もう、我々は、彼の後を追ふ必要がなくなりました。

A「我々は自分の修行が肝心です。(天を仰いで)おゝ修行！あらゆる難行苦行を積重ねる、そこに光明がある、おゝ………戦いだ。あらゆる苦行と戦ふ！たとへこの身體が、くだけやうとも、この命の續く限り、(涙ぐんで)この魂の續く限り！

(間)！ さあ、行きませう！

B「(無言で續く)

——静かに(幕)——

第二齣 魔王殿

正面稍上手に、王座あり。

中央には大なる壺あり。壺の中からは、呪ふやうに煙が立上つてゐる。

青い凄惨な光が、うすく、暗黒の中に、魔の煙のみ吐く。

二人の悪魔がつぶやくやうに語つてゐる。

一「今夜の月の色は血の色をしてゐる。

二「庭の花も、残らずしぼんだやうぢや。

一「何か變つた事でも起きるのではないか。

二「この静まりかへつた、悪魔の世界の今夜はどうだ。

(風の音さびしくかこむ)

一 「お！さびし相な風の音をきけ。

二 「何かの前兆ではあるまいか。

一 「きつと、よくない事が起つて来るのだらう。……いや、もう起つてゐるの
 かも知れない。

二 「(何かの物音を聞きつけて) 何んぢや？あの音は……

一 「誰かややつて来る。

(魔王殿の廊下を慌しく駆せ来る足音)

二 「あの慌しい様は……

一 「一大事ぢや。きつと、一大事を知らして来たに違ひない。

(悪魔三慌しく出て来る)

三 「(大声で) 大王！ 大王は何處ぢや、大王を呼んでくれ。大王を……

(奥より大王の抑制する様な聲)

大王の聲 「慌しう何事ぢや。(悠々と出て来る。それは白髪長髯の老魔王である。後に

魔女・悪魔従ふ)

三 「大王、一大事でムいます。

大 王 「どうしたと言ふのぢや。(聲は低い、然しそれは、人を威壓する様な調子を持つた聲だ。)

三 「カピラエの太子悉達多が、迦耶の森林菩提樹の下で、佛の悟を開かうとして居ります……

大 王 「(さすがに聞とがめて) 何ッ！ 悉達多が金剛座に着いて佛の悟りだど？……はムムム(カラ／＼笑ふ)大丈夫ぢや、彼は、まだ、まだ凡ての執着から離れきつて居ない。佛の悟り乍はもつての外ぢや。

三 「大王、それでも彼の今度の修行は真剣でムいます。正しく佛の悟りを開くものと見えて居ります。それに梵天のあらゆる神々の守護を受けて固めた金剛座、我には、とても寄りつけぬ程でムいます。

(大王は腕をくんだ儘空間を睨んでゐる)

一 「おゝ。この世界に佛が出来る。魔の世界は暗闇ぢや。

二 「今夜の月の色と言ひ、あの梟の鳴聲と云ひ、一通りではないと思つてゐた。

四 「いつも濛々と立上る、魔の煙さへ、今日に限つて衰へてゐる。

五 「庭の花まで残らず、しぼんでしまつた。

二 「(大きな聲で) おゝ! 魔の世界の亡びる時が来たのぢや。……………」

大 王 「(突然吐き出す様に) 黙れ! ……………騒々しい。たとひ、喬答摩が佛の悟りを

開かうと、魔の世界が亡びてなるか。! 魔の世界は永遠ぢや、たとへ梵天の神々を守らうとも、我々には戦ふ力があるのぢや!

二 「おゝ大王!

大 王 「よし。さほどに固めた金剛座なら、魔軍の力で打破つて見よう。

一 同 「大王!

大 王 「俺の力を信じよ。鏡を持って……………(魔女鏡を出す)

(取り上げて見る) うむ、見える。菩提樹の下に行者喬答摩の修行があ

りく〜と見える。(間)うむ、今、彼は故里のことを想ひ悩んでゐる。妃のこ

とを、我が子のことを、はゞはゞ、彼とてもまだ悩み多い人間ぢや、よし、

今、この擧に、彼を金剛座から引づり下すことは、いと易いことだ。

三 「大王。先づその手段は?

大 王 「ウム。お前は、見張りの番を怠るな。

三 「(引下つて) はッ(飛で行く)

大 王 「(悪魔二に) お前は、彼の以前の侍臣になつて、故里の一大事を告げるのぢ

や。急げ! すぐ用意ぢや。

二 「心得ました。(用意に行く)

一 「大王、尚その上の手段は?

大 王 「妃をやる。彼の最も愛する子、羅喉羅をやる! おゝ!

妃ヤスダラになるもの、愛兒ラゴラになるもの、用意ぢや。

魔女一 「(悪魔大と共に) 心得ました。(引下る)

「大王。尙その上の手段は？」

大王「(魔女二に) お前の番ぢや

魔女「大王、私が……」

大王「なせためらふ。世界中のあらゆる美を集めて造つたやうな姿をして彼の前に立つのぢや、そして、飢切つてゐる彼の前に珍味の美酒を盛つて、彼の心を、いや、命を奪ふのぢや。」

魔女「おゝ、わたしにそれが大王、お赦し下さい。」

大王「ならぬ、命令ぢや。すぐ立て、用意ぢや。」

魔女「(しほく)立つて行く」

大王「それで行者の立たない時は？」

大王「え！ くどくしい。その時は、悪魔の軍勢が一時に押寄せて、彼の金剛座を打破るばかりぢや。」

(悪魔二、慌しう戻つてくる)

三 「大王、大變でムいます。喬答摩は最早、家、妻子のことを離れて、解脱しやうとして居ります。」

大王「何ッ。それでは、家、妻子のことを忘れて、解脱しやうとしてゐるとか？」

三 「はい 左様でムいます。」

大王「ウム

(この時悪魔二、侍臣の風をして出て来る、續いて、魔女二、妃、悪魔六、羅喉羅に紛装して出て来る)

二 「用意は整ひました。」

大王「うむ、急げ、急げ、急げ！」

(一同急いで行く。大王静かに後見送る、然し心の中は隠でない。決心して立上り、弓を取り上げて、王座を下りて、後を追はんとして)

——静かに(幕)——

第三回 迦耶の森。菩提樹の下

(ナンダに手を取られて行者出て来る)

行者「あの木の蔭が、静に物想ひするに、ふさはしいと思ひます。色々御世話を掛けました。ではこれで……

ナンダ「色々尊いお話をきかせて頂いて、すがくしい心地が致します、有難うございました。では、これでお別れ致します。

お悟りの日の一日も早い事をお祈り致します。

行者「有難う！」

ナンダ「佐様なら！ (去る)

行者「合掌して別れる。後見送る。」

(吉利出て来る)

吉利「お、此方でムいましたか。私は、吉利と云ふ貧しい羊飼でムいます。今朝私

の牧場へ不思議な人がやつて来て申しますには。今、迦耶の森林に居らせらるゝお方こそは、佛の悟りを開いて、多くの人々をお救ひ下さる、尊いお方だから、お前は、柔い草を捧げて、この上もない幸を得よ。と言はれました。これは、吉祥草と言ふ、まことに芽出度い草でムいます。お足の下にお敷き下さいましたら、甚だ心嬉しうムいます。

行者「名もゆかしい吉祥草、有難う、あなたの志は厚く受けませう。

吉利「有難うムいます。(金剛座の上へ草を敷く、行者その上へ座す) 御成道の日の

一日も早くお祈り致します。

あなたの爲にも、幸をお祈りします。

吉利「左様なら！ (去る)

行者「左様なら！ (合掌)

(間)

行者「私は静だ！ 凡てのものの眞理を見極ぬる事の出来るやうな気がする。……

(強)く悟りを開くまではめつたに此座を動かまい。

鸚鵡の聲「悟りを開くまでは、めつたにこの座を動かまい。

行 著「おゝ！鸚鵡か、お前もその決心があるのか？」

ヲーム「お前もその決心があるのか？」

行 者「(無言)」

(長い「間」) (やがて遠雷の音)

(侍臣 (實は魔) 出て来る)

侍 臣「おゝ太子さま、此方でムいましたか。我がカピラエの城は大變で御座います。敵國の爲に、城は攻堅されました。國王を失つた私達は、太子さまに歸つて頂くより外に道は御座いません。その爲にお迎ひに參りました。お妃、耶輸陀羅さまは、御子羅喉羅さまをお伴れなされて、麓にお待ちで御座ります。さあ！早くお還り下さいませ、お供致します。

行 者「わしは家を捨てた修行者だ。わしの歸る處は、何處にもない筈だ。

侍 臣「二十九年、迦毘羅衛城のつきぬ花の庭をお忘れになりましたか。三時殿に舞

ひ狂ふ美女の管絃の音を、お忘れになりましたか？」

行 者「皆忘れてゐる。今は、三昧の身ぢや。

侍 臣「父王のお弔はどうなされます？いくら家をお忘れになつても、親を忘れることはなりません。

行 者「弔は心でする。

侍 臣「御妃はどうなさいます。お子さまはどうなさいます。

行 者「妻は捨てた！子も捨てた！自分の身をも捨てゝゐる。すべてを捨てた身には、何物もない

侍 臣「では、どうあつても、お還り下さいませんか？」

行 者「(無言)」

侍 臣「(泪ぐんで) お妃や、お子さまはどうなることで御座いませう！國中の人民は、どうなることでムいませう……國王を失つた迦毘羅衛は、光りを失

つたも同じでムいます。……暗闇の中にお迷ひなされる、お妃やお子さまを、お憐み下さい。敵國の怨をのんで従はねばならぬ私達をお憐み下さい。

(さめぐ泣く)

行者「(無言瞑目)

(遠雷轟く)

(妃 耶輸陀羅(魔) 羅喉羅をつれて出て来る。侍臣と顔見合す。侍臣去る。)

「(行者の膝にすがつて) おゝ殿下!

「(同じく寄つて) お父上!

(二人は左右からすがる)

行者「おゝ耶輸陀羅! 羅喉羅か!

「お懐しうムいます。

行者「(子に) 六年も見ぬ間に、大きうなつた喃。

妃

「御出家なされてからは、父親のない孤兒で育ちました。物心のついてからは、あなたさまの御行方を、よく訊くのでムいます。羅喉羅よ! 今日からはお前のおしたい申してゐた、父上と一緒に暮せるのだよ。

「お母さま! 私は嬉しうムいます。

「おゝお前許りではない、妾だつて嬉しいのだよ(行者に) お乗物は麓に待つて居ります。さあ! 早くお立ち下さいませ。

「お父さま!

行者「(子を妃に渡して)…… わしは歸るまい。たとへ家がどうならうとも、國がどうならうとも、わしは、一たん家を捨てた修業者だ。家も無い。子も無い。妻もない。おゝ……

「殿下! それは……?」

行者「わしは、わしの信ずる道に進まなければならぬのだ。

「殿下、殿下、お還り下さらなければ、せめて、わたくし達二人お側に置いて

降 覺

下さいませ。お願ひでムいます(すがる)

「お父さま!

子

者「振り切て、瞑目し」 歸れ、早く歸れ、(強く)とくこの場を去れ。

妃

「羅喉羅を抱いて、泣崩れる」 親を失ひ、國を失ひ、家を失ふた妾達、この

上は羅喉羅を殺して、わたしも自害致し升。

(羅喉羅を伴れて下手へ入る。暫くして妃の悲鳴聞ゆ)

行

者「(泰然自若として瞑目)

(遠雷愈々轟く)

(魔女天人の風をして出て来る。双手に酒を盛つた壺を捧)

魔

女「わたしは、天の神のお使でムいます。天の神々は、嚴かな、あなたの修行を

愛して、この酒をお送りになりました。(行者の前へ酒を差出す) お召上り

下さいませ。

行

者「(無言)

魔

女「この酒は、天上界のあらゆる木の實を集めて造つた、この上もない美酒、こ

行

者「(無言)の酒を飲む時は、忽ち疲れを休め、元氣を増す神の美酒でムいます。

魔

女「何をおためらひなさいませ。この尊い美酒を召上りになれば、御修行のため

行

者「(静かに取り上る)にも、どれだけ 幸多いことでムいませう。

魔

女「(ちつと見詰めてゐる)

行

者「(暫く持つてゐたが、やがて飲まんとする)

魔

女「(ちつと見てゐたが、遂に堪へられなくなつたやうに) お待ち下さいませ

行

(飛寄つて酒を取返す)この酒を、神の美酒と言つたは偽り、まことは、魔の

毒酒でムいます。これを飲む時は、身體はしびれ、心は亂れ、やがては命を

奪ふ恐しい酒で御座います。私はあなたの御修行を妨げやうとして、この魔

の毒酒を、神の酒、淨い御酒と偽りました。でもあなたの尊いお姿の前には

それを偽り切ることが出来ませんでした。わたしは、この恐しい罪の報いを、自から受けお詫び致します。(毒酒を取上げて飲まんとする)

行者「(止めて) 魔の娘待て、命を棄て、どうしようと言ふのか!

女「尊い御修行を妨げ、お命をまで奪はうとした罪、死んでお詫が致したうムい
ます。

行者「罪は死ぬることによつて消えるものではない。善い事を行ふことによつて、
始めて償はれるのだ。

魔女「でも妾は恐しい悪魔の娘、どうして善いことが出来ませう。

行者「たとへ魔の娘でも、善い道には變りはない。わしはお前の白蓮のやうに清い
ことを認めてゐる。

魔女「有難うムいます。では、わたしを尊い教への道にお導き下さいませ。(この言
葉の終つたと思ふ時、白羽の矢が胸にさゝる)あッ!(悲鳴をあげて倒れる)

(下手より大魔王憤然と出て来る。手に弓矢を持つてゐる)

大 王「(魔女の苦しむ様を見遣り乍ら)父の命に背いて、沙門の味方をした、憎い大

馬鹿者奴、汝の胸にさゝつた矢は、父が最後の贈物ぢや。……(行者を見
て、悠々と上手へ直り、傲然として、行者に) やい沙門、そこ退け。佛の悟

りと言ふものはお前の思つてゐる様な、そんな、生優しいものではない、い
らぬ苦勞をするよりも、早く國へ還つて王の位に就け、お前がもし王の位に
着いたなら、全世界は、お前の物になるであらう。

行 者「一たび吐き出した食物を、誰が再び口にしよう、一度棄てた王位に、誰が再
び執着しよう。

魔 王「強情を張らずと、早くその座を立去るがよい。

行 者「修行の出来るまでは、めつたにこの座は立去るまい。

大 王「(焦ら立つて) え! 強情を張るなら、魔の軍勢が押寄せて一陣のもとに、
蹂躪つてしまふぞ!

行 者「たとへ天地がくだけやうとも、この座はめつたに動くまい……

魔 王「うゝむ！(怒氣満面にして) その舌の根のかはかぬ中におのれ見て居れ、後悔するな。(天や地やあらゆる處へ呼び掛ける) 夜叉！阿修羅！カルラ！クバンダ！来れ！」

(喊聲起る。然し聲のみ)

魔 王「何をたらふか！早く来て沙門を、この座から引ずり下せ！(再び「ウオ！」聲のみ、而しその聲も次第に力無くなる) (怒りに怒つて) えーッ！何をぐずぐずしてゐるのだ、ウーム頼み甲斐の無い弱虫共奴、よし、この上は、(弓を取直して) 沙門命を貰ふた、覺悟せい！(弓を張る。弓折れる。！狼たへて、刀に手を掛け、抜かんとすれど抜けず悶え乍ら倒れる！再び起き直つて、叫び乍ら行者に飛掛つて行く、行者の身體より御光が出る、魔王それに當つて近寄ることができずとう／＼力抜けて伏す)！(餘程長い間)！(やがて力なく起きて、ヒョロヒョロ下手へ行きかける)

行者「(目を開いて) 何處へ行く！」

魔 王「わしは、わしの思つた處へ行く、悪と罪と禍とは俺の棲家だ、迷ひに迷つて、あくまでお前と戦はう。善あるが故に悪があり、悪あるが故に善があるのだ！お前の生命の永遠は、わしの生命の永遠ぢや、わしの——存在することが、お前の存在をより力強くすることぢや。沙門さらば！さらばぢや(力無く立去る)

舞臺静寂にかへる

長い「間」

突然 鸚鵡の聲「悟りを開くまでは、めつたにこの座は立去るまい」
行者の面崇高に耀いて来る。

明星輝く (舞臺の一角に氣持ちの變つた光がだん／＼度を加へて後) 行者すべてを悟つた様に立上りニッコと微笑む。

—(幕)— (GENDA)

上演について

上演なさるに當つて、一言私共の経験より來た事柄を、御参考までに申しておきます。然しこれは私共の演つたことであつて必ずしも最上級なものではありません、只皆様の御研究の一資料ともならば幸甚だと云ふことを申しておきます。

劇團同人

源 田 忠 弘 識

びつこの松虫　これは純全たる童話劇で。随つてその間に何等技巧を必要としません。只演出なさる方が(子供さんであつても大人であつても)何處までも子供らしくと云ふことを念頭に於て演出もし、又指導もしていたゞきたいと思ひます、殊に序幕の音樂會の場等一層この點に注意してなるべく技巧を凝らさず即ち「芝居」をせず極めて圓滑に演出して戴くことを希望しておきます。何を申しましたも「童話劇」ですから、もつとも二幕目、三幕目は幾等か技巧を要する點もございしますが、就中、蟻地獄の立

廻り、こほろぎの診察はある程度迄御研究を希望します。私共の蟻地獄では可成り激し立廻りをやりますが、それが又観客(殊に子供)には大喜びなのです。結局は見者本位ですから。こほろぎの醫者では、誇大した鉄(勿論本物ではありません)や虫眼鏡等を利用して、幾分か滑稽味を含ませた演出法を探つて居ります。序幕のダンスは小學校唱歌「虫の樂隊」の規定のダンスをやれば良いと思ひます。衣裳はなるべく簡單で而かもその人物なり、劇全體なりになるだけ近くなることに工夫しなければなりません。私共は虫と言ふ特殊な異つた世界を思はせるべく、支那的なものを選んで居ります、序幕に出るものはなるべく派手な、華やかなものを、又二幕目に出るものには尠しく凄味を持たせた、所謂暗黒色のものを用ひれば良いと思ひます。音樂はその劇の活殺に關係する重要なものですから、最もその選擇に御留意あらんことを希望しておきます、即ち序幕には輕快なものをやるとか、二幕目には陰氣な淋しい曲をやるとか、要するに其場々々の感じを一層深く観客に印象づけることが肝要

なことです。

電氣照明は序幕と三幕とは青を、二幕は赤を主に使用すれば可いと思ひます。

修食コドモ會の社會奉仕事業（各種各方面より感謝狀を受けたる一部記載す）

感謝狀（譯文）

（去る六月五日獨逸兒童救濟慈善會に對して）

謹啓千九百二十一年六月十二日附貴會より弊國兒童に與へられたる尊書正に拜受仕候 貴會は獨逸國幼少年が世界大戰によりて蒙れる災禍に對して深厚なる同情を有せられ救濟の爲慈善會を催され其の收益を贈與せられ 候 旨拜承 仕 候 該金員は貴書と共に本國に送附仕る可く 候 少からざる御施物と並に尊き御精神に對して國民一般に感謝一方ならざるものあるは予の確心する所に有之候 予は佛敎に關して深き智識を有せず 候 が大なる興味は有し居 候 佛の本願は實に慈悲にして貴敎の懇親平

等は之より發足せしなるべく何人も此の善美なる敎に反對し得ず若し世界人類が此の敎に服従し居りたらんには此の度の世界最大の恨事は生ぜざりしならんと思ひ候 敎存して之諾せざれば空し 貴會員は此の敎を實行せられ罪なき兒童の苦痛を救はんとせられたるは予の大に敬服する所に有之候 更に予の感銘せし一事は少年諸君が斯の如き善美なる行爲をせられたる事に有之候 予は斯かる 行 により佛の光明は歐洲の天地に輝くに至らんと信じ 候

貴會の慈悲に浴せし獨逸兒童は身心健全に發達し將來一度貴會に報ゆる所有之べく而して貴會に益々彼等を愛せられ兩々手を相携へて世界の平和人類の幸福に互に勞を惜まざらんことを希ひ申 候 終にのぞみ更に一度深厚なる感謝を表し又貴會諸君は愈々益 修養を完くせられん事を希ひ候 敬具

大正十年六月二十五日

獨逸大使

ゾ ル フ

神戸修養コドモ會御中

感謝狀

四	君主
恩	父母
	師長
	朋友

正直なれ、親切なれ、優美なれ、而して
 専ら忠孝の道を勵み「誓て四恩に報い」
 世の模範たらん事を期すべし。

修養コードモ會日曜學校出席帳

姓 「」の組「」部
 名 「」

三	學術
德	操行
	慈愛

勤勉なれ、快活なれ、綿密なれ、而して
 常に神佛及び祖先を敬ひ「誓て三徳を修め」
 有爲の人たらん事を期すべし。

第一期

月六	月五	月四

▲第一期間休まず出席すればカード六枚差上ります

第二期

月九	月八	月七

▲第二期間休まず出席すればカード十二枚差上ります

第三期

月一十	月一十	月十

▲第三期間休まず出席すればカード十二枚と雜記帳差上ります

▲第四期間休まず出席すれば賞状と賞品の差上ります

期四第

月三	月二	月一

▲しんぼうのなき人は何事も成功しません

▲注意▼

- 一、出席帳は修養袋に入れて自分の机の上につりさげていつも「修養」の二字を忘れぬやうにさい。
- 二、毎日曜日午前九時までに「會員章、経文、念珠、出席帳」御持参の上「はかま」をはいて御出下さい。
- 三、家庭にありては朝夕神様や佛様に御手を合せ其れより父母にあいさつして又食事の前にも御手を合せて御あがりなさい。

春日野秋葉山歡喜寺内

修養子ども會日曜學校

電話共合一四八〇番

参考

○若し日曜日に休めば兒童へ別項の如く印刷せし案内書を差出ます

修養子ども會	
日時	來ル 日午前八時開會
◎日曜學校御案内	
會場	春日野 秋葉山

○横はカネの三寸程縦は五寸程 (但し午後は歸宅自由)

○修養子ども會日曜學校御案内

日曜をむだに費やすな (毎週日曜日)

今の一日は後の一ヶ月よりも大切

(午前八時開會)

空気のよい景色のよい(会場)

上筒井通六丁目電車停留所より四丁程上る
身体に一ばんの薬なり

春日野 (秋葉山歡喜寺)

有難い爲になるはなし(午前八時より同十時まで)

信心は出世の近道なり

面白いお伽ばなし(午前十時より同十一時まで)

精神の愉快を感じます

御辨當(御辨當御持参か又は中食料金拾五銭で御仕度致します)

御用有る方は中食の前に御歸なさい

身體の運動は(午後十時より同一時半まで)

健康になるのが親への孝行(野球、フットボール、ピンポン)

算術並に國語の練習(午後一時半より同三時まで)

よき人と成るには學問から(學校でわからなかつた教科書を御遠慮なく御聞き下さい、聞くは一時の事
聞かざるは一生の損)

石の上にも三年(三ヶ月以上の皆勤者)には褒美を差上ります

こんきと辛棒のなき人は何事も成功しません

春日野 秋葉山歡喜寺

修養 コドモ會

御熱心なる會員諸君へ

市内ならば印刷の案内は百通までは六厘状袋の字は赤色で字を印刷するとよろしい

神戸市春日野秋葉山歡喜寺

修養 コドモ會 日曜學校

電話 三宮 六五一七番
振替口 大阪六三四〇二番

反物の端についてゐる黄色のもめん

印刷して黒字

秋葉山歡喜寺

修養 袋

姓名

兒童に呈す時は袋に縫はず其儘にして父兄にて袋に縫はして紐等は特に附けさすのです。これは父兄として修着の二字に注目させて印象を深くせしむる方法であります

入 會 書 雜 形

入會申込書		姓名	學年	住所	調氏保護者印名	會 年 月 日 達	考備
日 月 年 生	日 月 年 校	學 年 校	住 所	調 氏 保 護 者 印 名	會 年 月 日 達	考 備	
日 月 年 生	日 月 年 校	學 年 校	住 所	調 氏 保 護 者 印 名	會 年 月 日 達	考 備	
日 月 年 生	日 月 年 校	學 年 校	住 所	調 氏 保 護 者 印 名	會 年 月 日 達	考 備	

入會希望者は此の紙に住所姓名保護者を書き當日會場へ提出す

男女にかかわらず「はかま」をばいて御出下さい、お錢は入りません

日 校 の 登 録 雜 形

市 町 番 地 保 護 者 姓 名	入會年月日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

西洋管入籍として一枚づゝ離れる様にして増減を自由に半年か一期とす

追 補

補 追

四 弘 誓 願

大乘の菩薩が、修業の初めにあたつて、堅く心に誓ふ大きな願望が四つあります。これを四弘誓願といひ、曰く衆生無邊誓願度、煩惱無盡誓願斷、法門無量誓願學、佛道無上誓願成であります。

第一の衆生無邊誓願度と言ふのは、六道に流轉してゐる衆生の數は無量無邊と數かぎりはないが、これを濟度して生死の苦を免れさそうといふ誓願であります、即ち道を傳へて、世を濟ひ民を利そうと云ふ誓願であります。云ひ換へると自分の修徳した佛道を談り、感得した法悦はこれを願つて世人と其の樂しみを共にしようと云ふ誓願です。

高祖承陽大師様は

「おろかなる我は佛にならずとも

補 追

衆生をわたす僧の身ならん」

と御詠みになつてあります。皆さんも、かうして日曜學校でお聞きになつた有難いお話は、自分丈で聞き捨てにしないで、家へ歸つてから、家の方や御友達にお話しをしてあげなさい。さうすることがこの誓願です。

第二の煩惱無盡誓願とは、六道の衆生の生死の苦果を受けるのは實に煩惱を除かないからであるから自らこの煩惱を断除すると同時に他の衆生をして之を滅ばさしめやうと願ふことでもあります。煩惱とは貪欲、瞋恚、愚痴の三毒を言ひ、實にこの三毒は時に私共の生命をも断ちます。而かも之を断盡することは、容易な業ではありません。釋尊は

「先づ心を清澄にすべし」

とお示しになつてあります。私共は先づ濁りのない清い心にならねばなりません。

第三は法門無量誓願學、佛の法門は廣大深遠で容易に學び得るものではありません故にこの誓願をして自らも學び又衆生をも學ばすことを願ふのであります。法門は無

量と言ひましても要約するなれば戒定慧の三學であります。私共は常に三學の修習を怠つてはなりません。

最後は佛道無上誓願成であります。

以上の三つの誓願をし、そうして尙ほ精進して最勝無上の佛道を體會しよう、他の者も同じく證らしめようと云ふ願願をすることでもあります。

「牛は水を飲みて乳となし、蛇は水を飲みて毒となす。智者は學びて菩提を成じ、愚者は學びて生死を成ず」——華嚴經——

水を飲んで乳とするのは牛の本性であります、學んで菩提を成ずるのは佛子の本徳であります。

實に佛道は佛の示現し給ふ大道であります。而かも、それは私共の脚痕下であります。一寸修すれば一寸、一尺なれば一尺の佛道を成じ、修することが不斷であれば不斷の佛道を成じます。

私共はこの四弘誓願を發して、不退の精進を續け、無限の衆と共に無限の法悦を

樂しみませう。

三 身

三身とは、法身と報身と應身のことです。

一の法身と云ふは、宇宙の眞理、即ち法性の理體を指して、佛身と稱します。此の佛は無色無形で、赤白黄等の色もなければ、長いとか短いか圓いとか又は四角とか云ふ形もなく、示滅の終りなく普く世界に徧満して、到らぬ處なく、及ばぬ限もありません。さればこの佛様は、私共の肉眼では視えず亦その説法も現實には聴くことの出来ない御佛であります、が廣大無邊の法性の理體にましますが故に、法身佛と名づけるのであります。

二に報身とは、宇宙の眞理を證悟し給ひたる佛身、即ち因位の願行により其の結果として報い顯れた御身であります。この佛様は、淨土に常にまします、相好圓滿、光明 無量壽命無量の徳を具へてられます。さればこの報身佛は、成佛の始めはあ

りますが、示滅の終りはありません、未來永劫に亘つて、常住不變、罪深き私共を救ひ給ふ阿彌陀如來も亦この報身佛と申し上げます。

三に應身とは、衆生の機宜に應じて、この娑婆世界に現れて、多くの人を救ひ給ふ御佛であります。我が釋迦如來は、衆生化益の爲に、此の土に現はれ、出家度生して遂に入滅遊ばした佛でありますから、この應身佛と申し奉ります。實に應身佛は、成佛の始めあり、また示滅の終りのある佛様であります。

六 道

六道とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上を言ひ、すべて迷ひの衆生は、前生に作つた善惡の業因により、此の六道の中で生死流轉するのであります。

地獄と云ふのは皆様もよく御話しに聞いてゐる通り、最も悪い事をしたものが墮ちて行く處であつて此處に墮ちた者は最大の苦痛に悩まされねばなりません。大地の下四萬由旬の下にあつて、其の怖ろしい處で罪深き者は幾億年もの間、山に壓され、石

に打たれ或は熱湯に煮られ、針の山に登らされ等して苦しまねばならない。其の苦しみの場所も罪の軽重で様々で百三十六地獄もあるそうです。

餓鬼道は地獄に次ぐ苦しみの世界で、大地の下五百由旬の處にその本處があります。其他山や林の中、墓場、それから大小便所のやうな不淨な場所に住むものもあつて、其種類は非常に多いと申します。この餓鬼道に墜ちた者は、常に飢餓に悩まされ、水を見て飲まうとすれば其の水忽ち火となり、食物を貰つて食べやうとすればそれが直ちに火焰となつて、反つて自分を焼きます。この様にこの界は飢渴の苦しみを受けますから餓鬼と名づけます。慳貪で布施を好まなかつた者の行く處であります。畜生道とは、愚痴で能く自分で獨立する力なく、常に他の爲めに畜養せられるもの、行く處であるから、かう名づけるのであります。此處では、たゞ食欲淫慾の情のみ働き、父子兄弟の別なく弱肉強食いたします。かの禽獸 蟲 魚の狀態は丁度これであります。

以上の三つは何れも皆惡因によつて、苦しみを受ける處でありますから三惡道と申します。

修羅とは阿修羅とも云ひ、常に争ひ闘ひの絶え間のない血なまぐさい處であります。日頃橋慢で諍ひを好むものゝ、死んでから行く所であります。

人間界は今の私共の境界であります。如何に幸福だと言つても、天上界の様に自由であり満足である事は出来ません。苦しみと楽しみは相半ばし、善惡が交つて、殊に五慾の情が盛んで、之を滿せば喜び、これを得られなければ憂ひます。

最後の天上界とは、天人の棲んでゐる世界を云ひます。この世界は、果報の最も勝れた所で、衣服飲食住處等皆んな清潔であり、慾しと思つて得られないものなく、思ふてかなはないことはありません。立派な行ひをした人の來る處であります。然しながらこの楽しみも永久に續くものではありません。この果報のつきた時、また苦しみをうけねばならない。

私共は樂しさや嬉しさに安心しきつて終はず、常に御佛の御教に遵つて、つきぬ生命をいただかねばなりません。

赤い珠

一人のお坊さんが珠みがきの店頭へ立ちましたので珠みがきは何か上げようと思つて内へ這入りました。お坊さんは赤い衣を着ておりました。その赤い色が、きれいな珠に映つて、珠までが眞つ赤に見えました。するとそこ、家鴨がひよこくやつて来て、赤く見える珠を、何かの實だと思つて、つるツと呑んでしまひました。お坊様はどうなることかと思つて心配してゐますと、そこへ珠みがきが出て来ました。そして一ばんの珠がなくなつてゐるので吃驚しました。

『もしお坊さん、あなたは今こゝにあつた珠を知りませんか?』といつてたづねました。お坊さんは、家鴨が呑んだのを知つてゐますけれど、それを言へばすぐ家鴨が殺されてしまひますから、いくら尋ねられても黙つてをりました。

『黙つてゐるところを見ると、きさまが盗んだんだナ、あの珠を只の珠だと思つてゐ

るのか、あれは王様のお吩咐で磨いてゐる大切な摩尼寶珠だ。ようし出さないといふなら、かうしてやる。』といつて、珠みがきは、お坊さんを荒縄で縛つて、鞭でびしびし叩きました。けれども、お坊さんはぢつと我慢してをりました。お坊さんの目や鼻からは、血がたら〜流れました。

すると家鴨はまた、ひよこくやつて来て、お坊さんの血をすりました。珠みがきは、腹が立つて爲方ありませんから、『コン畜生何をしてゐるんだ?』といつて、鞭で家鴨を叩き殺してしまひました。

お坊さんは、どうにかして家鴨を助けてやらうと思つたのですが、家鴨が殺されてしまつては、もう爲方ありませんから、珠はあの家鴨が呑んだのたといふことを苦しい中から申しました。

珠みがきは、すぐ家鴨の腹を割いてみますと、珠がころ〜と出ましたので、びつくりしてお坊さんの縄を解きました。そして、自分の軀を地べたへ投げつけてお詫びしました。

—〔完〕—

日曜學校時間割

登校直チニ 出席カード捺印 各個佛前禮拜 自由遊戯 集 禮拜 君ケ代 讀經 法話 唱歌	午前七時五十分 (始業十分前)	自八時 至八時三十分	夏季	九時五十分 至十時三十分	冬季
分級教授 遊戯 手話 工戯	休憩	遊戯 (佛組女子 ハ裁縫) サンブツ歌 四弘誓歌 禮拜	夏季 自八時卅五分 至九時二十分	冬季 自九時三十分 至十時三十分	冬季 自九時三十分 至十時三十分

大正十五年五月十五日印刷
大正十五年五月廿八日發行

定價金參圓五十錢

不許
複製

發行人 神戶市春日野秋葉山歡喜寺住職 沙川泰仙

編輯人 神戶市加納町四丁目二番地八十六番屋敷 西村富士馬

印刷所 大阪市西區阿波座二番町一番地 日本印刷製本株式會社

神戶市春日野秋葉山歡喜寺

發行所 神戶修養會

電話葺合一四八〇番
振替口座大阪三三四〇番

533
178

終